「神はすべてのものを恵んでくださる」

ローマ８：３２

堀田修一　２３・１１・１２

本日は教会創立５８周年記念礼拝です。本日のみことばは、この記念礼拝に誠にふさわしいみことばです。「私たち（一人一人と教会。主は一人一人のためと教会のために十字架で死なれた。「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられた」エペソ５：２５）すべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか」：３２。この５８年間、教会の全ての霊的、物質的必要、牧会者、支える信徒、救われる人々、転入者が与えられ続けているのは、本日のみことばの約束を神が真実に成し遂げておられる確実な証明、証しです。※証し。週報の報告をご覧ください。

Ⅰ　私たち一人一人と教会の存在は、神の愛にかかっている。

１．神の愛に変化が生じる可能性があれば、私たちは、滅びの危険にさらされ、完全にあやふやな状態に置かれます。何よりも重要なのは、私たちに対する神の愛が少しでも変わる恐れはないと確信することです。本日のみことばは、その中心のみことばです。神の愛による私たちの罪の贖罪の教理についての最も偉大なみことばであり、聖書の中で最も大きな慰め、安心を与えるみことば！この一節の中に何にもまして素晴らしく、重大な教理の数々が満ち満ちています。「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか」：３２。

２．このみことばの目標は、私たちに対する神の愛が尽きたり減ったりすることなど全くないと証明し、立証することにあります。パウロは最高に大きい恵み（御子イエスご自身）を下さった神が、それより小さい恵み（私たちの全ての必要な恵み）を与えてくださらないことがありましょうと語っています。神が、私たちの救いのために、何にも勝る大きな御業（ご自分の御子さえも惜しむことなく十字架の死に渡され私たちの罪の贖い＝「永遠の滅びからの買戻し」、完全な償い、罪の負債の完済を完成された）を成し遂げられたのだから、神が私たちの中でその御業をお続けにならないなどということは全くあり得ません。究極の救いの完成、栄化という最終的なご目的、御計画の成就へと私たちを導くまで、神は、大きな愛と真実をもって御業を続けてくださるのです！

３．本日のみことばの最初に訳されていない重要な、原語があります。それは、「確かに、実際に」。これは、32 節のみことばを、強調する接続詞です。「確かに、神が、御子とともにすべてのものを私たちに恵んで下さらないことは絶対にあり得ません」という強調です！

Ⅱ　聖書は、救いと神の愛の確信をどのように与えているか

１．救いの確信は、数々の神の御業の事実に基づいています。すでに神が行われた確実な事実、特にカルバリに立つ主の十字架の死という事実です。他の宗教に、自分たちの教祖が自分たちの身代わりに死なれた事実を教える宗教はありません。パウロは語ります。このほむべき主の事を深

く考え、主の十字架の死の愛の事実をいつも思い出したい。私たちは、人が作り出した物語ではなく、事実である主の十字架の出来事を見つめ、歴史の事実としての救いの土台である主の十字架を信仰の目で見つめ続けたい。

２．主の御業の事実だけではなく、その「意味と意義を知ること」が救いの確信となる。言葉を換えると、教理を自分の確信の土台とすること。教理とは、様々な事実や出来事の意味と意義を説明するものです。ある事実を見つめても、その意味や目的（教理）を知らないなら救いの助けにならない。たとえば、主の十字架の死の歴史的な事実を知っていても、「主の十字架は、あなたの罪のための死ですよ」というその意味と目的（教理）を教えてもらわなければ、救いの良き知らせ、福音とはならない。※ある人々は、私的解釈をし「主の十字架は、主の歴史的なみじめな敗北の出来事です」と語ります。それ故パウロは、歴史の事実を示すだけではなく、神の御計画、意図、意味、キリストの御人格、主の十字架の死の意味（教理）を明確に語るのです。そのような説明、教理こそ、キリスト教信仰の軸となる中心的な大教理です。事実は欠くことが出来ず、それに加えて解き明かし、教理も欠かせない。事実も事実を説明する教理も必要です。そのために、事実と事実を説明する教理を語る説教が教会には必要です。自分の救いを真に確信したいと願う人は、キリスト教の教理を堅くつかめばつかむほど大きな救いの確信を得ます。本日の８：３２は、事実と事実の意味（教理）の双方を私たちに提供しています。※証：事実とその意味の大切さ。

３．事実の意味である教理を大切にしない時に、教会は異端、間違った教えを判別できない。説教者が主の十字架が歴史的な事実であると語るだけでは人を救う福音にはならない。十字架の事実だけではなく、主の十字架の意味＝「主は、あなたを愛して、あなたの罪のため、あなたの救いのために死なれたのですよ」という意味、教理、福音が重要です！基本教理の学びも大切にしましょう。

Ⅲ　32 節の豊かな意味と意義

１．パウロが、第一に主張しているのは、主の十字架の出来事が、父なる神がなさった愛と義の御業だったということ。神ご自身が、私たちを愛し私たちのために、すでにご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された以上、私たちのために必要とされるどんな恵みも与えるのを拒まれるはずがない。神こそカルバリの上で行動されたお方！この神が、最も大切な御子さえ惜しまずに私たちに与えてくださったのなら、御子以外の必要な恵みを私たちに与えてくださらないわけがありましょう。神は与えてくださっている。

２．「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスをあなたがたは律法を持たない人々によって十字架につけて殺したのです」使徒２：２３。具体的に事を行ったのは当時の人々だったが、それを実行されたのは神の御計画だった。「神が定めた計画と神の予知」だった。使徒４：２８では、当時の指導者とイスラエルの民が主を十字架につけたことを「あなた（神ご自身）の御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことをすべて行いました」と断言されています。

３．主の十字架の出来事において、神は受け身ではありませんでした。聖書の教えによれば、主の十字架は、神が世界の基を据えられる前に計画され、予定された（人の予定は変わりますが、神の予定は決して変わらない）ことでした。主の十字架は、人間の悪意とねたみと嫉妬と霊的な盲

目さと愚かさの結果でしたが、そのすべてをご存知の偉大な「神の定めた御計画と予知」によるものでした。神が受け身ではなく、積極的に行ってくださった御業こそ、神がこれから何を行ってくださるかを私たちにとって確実にしてくれる保証です。神こそ主を十字架につけられた方であり、神こそ主をよみがえらせたお方です！

４.「ご自分の御子をさえ惜しまずに」。これは、決定的に重要なみことばです。神が十字架の上で惜しまれなかったのは「ご自分の大切な大切な御子」。この御子は神の愛する御子、永遠から神と一つであられたお方、神の永遠の神聖なご性質に、御聖霊とともにあずかっている方、神がそのご性質の限りを尽くして愛しておられた方にほかならない。この愛する御子をこそ、御父は惜しまずに、私たちを心から愛し、私たちすべてのために御子を十字架の上で「死に渡されたのです」！大切な御子をさえ私たちを愛して与えてくださった神は、私たちに真に必要な恵みを与えてくださらないわけはありません。「主は、あなたがたに恵みを与えようと待ち、…あわれみを与えようと立ち上がられる」イザヤ３０：１８。御子を与えて下さった恵みを感謝し、日々の恵みを信じて祈り求めましょう。聖歌５９３「ああめぐみ！」と賛美。